

「水の作文大賞」

水がつかないでくれたもの

熊本大学教育学部附属中学校 二年 吉本 諭司

僕が住んでいる地域は、地名に津がつくほど、水豊かな場所である。平成の名水百選である江津湖は、日量約四十万トンの湧水量をもつ熊本市最大の湧水地であり、健康水源地は熊本市全体の水道水の四分の一をまかなっている。もちろん近所の神社にも湧水があり県名水百選に選ばれてからは、日中多くの人が水をくみに訪れている。

「この神社の水で入れるコーヒーは別格だ。」と評判も高い。僕の家のお庭に使用する水も地下水だ。そのため我が家のメダカたちは百パーセントミネラルウォーターの鉢の中で優雅に泳いでいる。ぜいたくなメダカたちだ。熊本市の上水道は蛇口をひねればミネラルウォーター、身近に豊かな水がある僕もぜいたくなメダカであった。

ぜいたくな水の生活の毎日、水のありがたさに気付いていなかった日、熊本を地震がおそった。激しい揺れはいつまでも続き、寝ていた僕は立ち上がることも出来なかった。前日の地震より大きな強い揺れがまだこれから起こる地震の予兆であり、これから大地震がおこるのではないかと不安な気持ちでいっぱいだった。一晩中鳴りやまない携帯の緊急地震速報の音。何度も続く深度5、6の地震に九州が二つに裂けてしまう位の地殻変動ではないかと不安にかられた。一晩中鳴りやまないヘリコプターのプロペラの音。時間を追うごとに数も増え音も大きくなり、地震の被害がただ事ではないことを想像させた。一晩中鳴りやまない救急車と消防車のサイレンの音。火事が起こっているのか？あたり一面ガスのにおいが鼻につくこの地まで火がおそってきて爆発がおきるのではないかと不安にさせた。そんな先の見えない不安と恐怖で押しつぶされそ

うな夜が明けると、被害が明らかになり、愕然とした。ブロック塀は倒れ、庭の木々や草花はその下敷きとなっていた。屋根からは大量の瓦が車の上まで落ちていた。家中の物はメチャクチャに散乱し、食器はすべて割れていた。しかし、これはほんの序の口であった。近所の祖母宅は半壊し、親戚の家はペチャンコになってしまっていた。命があることがありがたかった。少しはなれた友達の家は付近は地震でなく、爆撃を受けたかと思えるほど景色が変わってしまった。

蛇口をひねったが水は出なかった。大変なことになってしまった。災害時に役に立つと地下水を利用している庭の水があつた！と水を出したが、まるでコーヒー牛乳のような水が出てきた。この茶色にごった水は地下での大きな出来事を物語っていた。庭の茶色の水はチョロチョロながら止まることはなかったため、トイレの水等に利用出来た。ご近所の方々が喜んで水を汲んで行かれた。今まで話したこともなかった人もこの水を通して仲良くなれた。買い置きのパペットボトルが何本かあつたが、何日続かわからない断水だ。神社に何度も水をくみに行った。日中は三時間待ちだったので早朝日の出とともに向かった。近所のご老人宅の分も、お向かいの家の分も。神社の水でご飯を炊いた。そしておにぎりをたくさん作ってお湯をわかしてお湯とおにぎりを皆に配った。断水が回復して益城町の家が全壊し避難所生活をしていた親戚を我が家のお風呂に呼んだ。上水道でさえまたにごりがあつたが、数日ぶりの湯ぶねをととても喜んでくれた。ぼくの町の豊かな水。この水の力がご近所や親せきなどを助けてくれ絆を強くしてくれた。最高に水を大切に使用した数日間であった。

地震の日よりもうすぐ一年がたとうとする今、折れて倒れた木々も青い葉をつけ出した。まだ、ご近所の取りこわしも半ばであるが少しずつ前に進んでいるのが分かる。水の豊かなこの地に住む僕、水に助けられ、水で絆を深めた。これからこの豊かな水を大切に守り恩返しをしていきたい。明るい未来のために。